

葉靈鳳作品の比較文学的研究

—フロイト精神分析と西洋文学作品の影響を中心に—

氏名 石井 洋美

葉靈鳳(1905-1975)は愛書家である。彼は20歳から30歳までの間に、編集の仕事と印税で得た金銭をつぎ込んで、1万冊を超えるという数の書籍を買い集めた。その大部分は洋書であったという。葉の上海における蔵書は淪陷期に散逸してしまったが、それらの書物が葉に与えた影響は、彼の創作の中に見出すことができる。

葉は南京に生まれ、1924年に上海に出て上海美術専科学校に入学した。1925年から1927年初め頃までは創造社のメンバーであった。創造社では各機関誌の表紙や挿絵を描き、出版部の設立に尽力し、編集作業や雑用の傍ら小説や随筆を書いていた。彼は創造社のロマン主義の風格に憧れ、郁達夫に影響されて19世紀末西洋唯美主義芸術に傾倒し、創造社を離れた後もその嗜好は変わらなかった。1932年以降は作風を変え、モダニズム作家に転身した。葉の上海における創作期間は1924年から1938年までの約15年間である。そして彼の小説のほとんど全てがこの15年間に書かれている。本研究は葉が読書を通じて受けた西洋の影響が、彼の創作のどこにどのように表れているかを探究することを目的としている。

第一章では、葉のフロイト精神分析の受容と応用に影響を与えたものとして、中国におけるフロイト精神分析受容の特徴と、葉が属した創造社におけるフロイト精神分析応用の特徴について述べる。そして、その後、心の3層構造を応用した「女媧氏之遺孽」、夢理論を応用した「姉嫁之夜」、自由連想法を応用した「明天」、道徳的マゾヒズムに関連する「摩伽的試探」の4編を取り上げて、葉の作品中へのフロイト精神分析の応用のしかたについて論じ、これら4編の作品に対する批評を述べる。

フロイト精神分析は無意識の存在を理論の前提とする。1900年に無意識と夢の関係を確立した『夢解釈』が出版されたことによって、フロイト精神分析は世界的に注目された。それは1920年代から30年代の中国においても一大ブームを巻き起こし、精神分析を応用した創作、文芸批評が盛んに行われた。葉の創作活動はフロイト・ブームとともに始まったということもできる。フロイト精神分析を応用した小説によって、葉は心理分析小説の先駆的な作家であると言われると同時に、性愛小説家と呼ばれることにもなった。登場人

物の無意識をいかにして効果的に描くかという探索が、小説の技巧に対する葉のこだわりを育てることにもなった。フロイト精神分析は葉の早期作品を論じる上で避けて通ることのできないものである。

第二章では、夢を仕掛けとして用いて登場人物の無意識を流露させた作品の一つである「鳩緑媚」を取り上げる。この作品もまた、フロイト精神分析の影響を受けて創作されたものであると考えられる。「鳩緑媚」にはミザナビームという技法が用いられており、そのことは先行研究によって指摘されている。しかし、この技法が「鳩緑媚」においてどのように応用されているか、どのような効果を生んでいるかについては、具体的に述べられてこなかった。本章ではテキストを精読することを通じて、葉が応用したミザナビームの特徴を詳しく見ていく。ミザナビームの本質は「作品内部における主題の二重化」であるとされるが、「鳩緑媚」の主題を探究することを通じて、主人公の夢には、唯美的な作品世界を作り続けたいという葉自身の願望も反映されていることが見出せる。

1932年以降、葉は作風を変化させ、モダニズム小説家に転身し、中国新感覚派に接近したと言われる。第三章では、まず先行研究とテキストに基づいて、葉が描いた女性主人公が劉呐鷗、穆時英が描いた女性主人公と容姿の上で共通点を持っていることを確認する。その上で、それでもなお葉の作品が異なる印象を与える原因を、描かれた女性の性格、男性主人公の視線、男女関係のありように焦点を当てながら探っていく。その結果、葉の女性観が早期作品から一貫して変わっていないこと、それは中国新感覚派の中心作家である劉呐鷗や穆時英の女性観とは異なっていることを述べる。そして、葉が描いた男女に影響を与えたものの一つに、彼が少年の頃から憧れていた『椿姫』があること、彼の作品には、『椿姫』や『椿姫』型の物語に対する彼の理解のあり方と嗜好が反映されていることを述べていく。

第四章では、モダニズム小説から「麗麗斯」を取り上げ、アナトール・フランスの「リリトの娘」と比較し、「麗麗ス」は「リリトの娘」に着想して書かれた作品であることを指摘する。葉はフランスの「リリトの娘」の中に、リリスを魔女とする西洋の文学伝統とは異なる美しいリリスの物語を発見し、また葉が抱いていた教会の権威に対する不服や懐疑を解消するものを発見して、フランスが創造した無垢なリリスの表象に触発されて「麗麗ス」を書いたと考えられる。葉は「リリトの娘」を下敷きにして、1930年代の上海に生きる純良で孤独な女性とそのような女性に憧れ、そのような女性を追い求める男性の姿を描いたのである。

葉の作品に対する批評は、創作された当時には毀誉褒貶ともに存在したが、その後、長い空白があった。1980年代に入って、それまで否定されていた作家が改めて評価され、彼らの作品集が出版されるようになると、葉の作品も再び読まれるようになった。以来、葉の小説・随筆・挿絵などの作品に関する研究は蓄積されてきている。しかし、既に40年近くが経過したにも関わらず、葉霊鳳研究は目覚ましく進捗しているとは言えない。そして、日本における批評は極めて少ない。

本研究はテキストを精読することによって、また葉自身が残した読書に係わる随筆の言葉を抛りどころとして、彼の創作の中に見出せる西洋の影響を探究するものである。